評論「王冠」をめぐって
——ロレンスの“脱”国家観

有　為　楠　　泉

1．　ライオンとユニコーンの闘い

ライオンとユニコーン
王冠求めて闘った
The Lion and the Unicorn
Were fighting for the Crown

（「王冠」第一章プロローグ）

百獣の王ライオンと純潔の乙女の守護者ユニコーンは何故闘っているのか。もしどちらかが勝つとしたら，そのことにどういう意味があるのか。そもそもどちらかが勝つということがあるのか。王冠は何のためにあるのか。

評論「王冠」（“The Crown”）第一章で，D. H. Lawrence は，人間の生きる様をライオンとユニコーンの闘いに喩えて考えようとする。

「王冠」は，ロレンスの小説や詩との関わりにおいて重要な作品であるというだけでなく，彼の人間観，世界観，国家観を知る上で，鍵となる要素を多分に孕んだ作品であった。「王冠」は六つの章から成り，一，二，三章がそれぞれ雑誌 *The Signature* の一号（1915 年 10 月 4 日），二号（10 月 18 日），三号（11 月 4 日）に掲載された。*The Signature* は第一次世界大戦が始まって凡そ一年，ロレンスとマリ（John Middleton Murry）が自分らも何かしなければ，と考えて始めた雑誌であった。しかし，大戦のさなか

に“新しい生”を呼びかけたロレンスのこの評論は，読者の困惑を招き，主催者のマリとマンスフィールド（Katherine Mansfield）が支援を取り止めたため，雑誌は三号までで廃刊となった。従って「王冠」の四，五，六章は執筆された時点で公の目に触れることはなくなった。

しかし，ロレンスはこの評論を，わずかに改訂して1925年に別の作品とともに評論集の形で出版した。*Reflection on the Death of a Porcupine and Other Essays* である。その際につけた「王冠」の序文（“Note to The Crown”）で彼はこう言う。「当時もわかっていたし，今もわかっているのだが，公的に（私自身がということであるが），何かしようとしてもだめだ。ただ現在の形を変えようとしたのではだめだ。時代の巨大な形が結局は進んでいく。それを抑えるのはその中から吹き出してその基盤をゆっくり破砕していく新しい生の芽だけである。そして我々にできるのはこの新しい芽がつぶされないように何としても守り，成長させるように闘うことだけだ」と。

I knew then, and I know now, it is no use trying to do anything — I speak only for myself — publicly. It is no use trying merely to modify present forms. The whole great form of our era will have to go. And nothing will really send it down but the new shoots of life springing up and slowly bursting the foundations. And one can do nothing, but fight tooth and nail to defend the new shoots of life from being crushed out, and let them grow.[1]

1925年と言えば，メキシコに四度目の滞在をしていたロレンスが，医師から肺結核を言い渡された後，蒼白な顔色を妻フリーダ（Frieda）の白粉で隠して国境を通過し，ニューヨーク経由でイギリスに戻った年である。自分の健康状態と生の限界を予知し，改めて人間の真に生きることの意味と

形の問いかけを始めることになったこの年に，ロレンスは「王冠」を再度読者の前に提出したのである。1915年に執筆された時から十年を経て，評論の全容が明示された。そして，その十年を経た後も，当初ロレンスが人々に訴えようとしていたことは少しも変わらなかった。(「これは今でも私が信じていることを語っている。」—「序文」より）従って，「王冠」は，『虹』(*The Rainbow*）と『恋する女たち』(*Women in Love*）の二大小説の中間に書かれ，だが，『虹』の発禁処分，大戦のさなかのドイツ・スパイ容疑，生活苦というロレンスの人生の悪夢とも言える頂点で表された彼の思想の神髄と考えられ，また，病魔につきまとわれる後年の人生の旅立ちにおいて新たに静かに訴えかける思想の根底でもあったと言えるだろう。

本稿は，評論「王冠」の意味と役割をロレンスの他の幾つかの作品との関連性の中で読み返し，かつ，そこに見られる国家意識，もしくは，“脱”国家意識，さらにはそれを越えた地点に見晴かすロレンスの展望といったものを探っていこうとするものである。

2．ライオンの勝利

ライオン，ユニコーンを打ち倒し
其を町から追い出した
The Lion beat the Unicorn
And drove him out of town

(「王冠」第二章プロローグ)

百獣の王ライオンと純潔の乙女の守護者ユニコーンが闘っている。百獣の王が王冠を手に入れてのんびり横になるや，即刻純潔の君主ユニコーンが人の心から飛び出し，それに飛びかかるだろう。純潔の君主が金色の一角に王冠をのせて横たわれば，ライオンが誰しもの魂の中にあるその寝ぐらからたちどころに飛び起き，それに飛びかかるだろう。

人間の心の様を，ロレンスはこのように表現する。無論ライオンとユニコーンが王冠をはさんで後足立ちで向かい合う図は，イングランドとスコットランドの併合を象徴する英国王室の紋章でもあり，それへの，そして特に英国民への連想はあるだろう。しかし，ロレンスがこのイメージを使って表そうとしているのは，人の心の中の競獅子（きおいじし—a lion rampant）と競（きおい）ユニコーンの対峙についてである。端的に言うなら，それは力志向と愛志向の競い合いと言ってもよいだろう。あるいは，ロレンス自身の表現を使えば，ライオンの住む闇とユニコーンの住む光の対決である。どちらも闘うこと自体にレゾン・デートルを見出している如くにさえ見える。そしてライオンは，ユニコーンを打ち倒すと，徹底して町から追い出してしまう。町は全てライオンのものとなり，ユニコーンの臭いも痕跡も残らなくなる。ユニコーンは神話の中の生きものとなり，実際には存在しなかったというわけだ。

しかしながら，そうやって勝ち残ったライオンは何であるか。そこにあるのは，自分を取り囲む空白，欠如によって，より一層全てのものを自分の方に引き寄せようとし，恐ろしいまでの自意識によってうなり声を上げ，崇高なるものの忘却の中に，真の存在を中断されたものの姿のみである。

戦争に対する批判という事から言えば，ロレンスがここで暴露して見せたのは，人の心に住む果てし無き力志向とそれの行き着く空白，無，という底無し沼であった。第一次大戦のさなかに大胆に呈示されたこのライオンとユニコーンの闘いの寓意は，イギリス人を困惑させ，背筋に冷たいものを走らせるに足りたであろうと推測される。後で触れるように，同年9月に出版された小説『虹』が，11月13日に法的に発禁となったのは，名目は猥褻の故であっても，*The Signature* 誌を含むロレンスの発言に当局が警戒の念を抱いていたことと決して無関係ではありえない。

しかしながら，むしろ，ロレンスの言おうとしたところは，単に，力志

向批判，戦争批判に留まるものではなかった。彼がライオンとユニコーンの闘いの寓意として述べようとしているのは，闇と光の宇宙二元論であった。そしてそれは同時に肉と心，肉と言葉，女と男，の均衡の上に立つ生の二元論であった。ロレンスがやろうとしていたのは，存在論的“新しい生”の呼びかけであり，むしろ，戦争と直接結びついて生まれたものではなかった。なぜなら，以下で見るように，ロレンスは既に大戦の始まる以前から，この考えを充分暖め，評論「トマス・ハーディ研究」(“Study of Thomas Hardy”，以下「ハーディ」と略す）でも開陳していたからである。「ハーディ」はしかし，その時完成しておらず[2]，ロレンスはその考えを何か別の雑誌かパンフレットの形で発表することを考えていたのであった。「王冠」は，従って，「ハーディ」を読むこと抜きで語ることはできない。

3．「トマス・ハーディ研究」

トマス・ハーディについての言及だけに留まらず，壮大な歴史論，文明論とも言うべき評論「ハーディ」は，古代から現代に至る人間の営みの基底にある構造原理を次のようにとらえている。「法」(Law）と「愛」(Love）の二つの概念が，人間の営みの根本にあるということである。「法」とは，言わば，約束，掟であり，キリスト教社会では，人間は既にその存在の始まりからしてこの「法」のもとに神によって作られたものである。「法」とは，絶対的なもの，言葉（Word）で表されるものであり，犯すべからざる約束であった。人は，道に沿って，そこから外れずに歩いていかなくてはならない。しかしながら，人はパンだけで生きられないように，「法」だけによって生きることはできない。それを越えてしまったところに自分というものが顔を出す。(“I am I.”）つまり，人間には，それぞれ自分自身の中にあって，自分だけにわかる自然法（Natural Law）があるということである。それは，しかし，互いに一致しないものであり，自分の法と異なる他者の法を認めることも人は学ばなければならない。それ

がキリスト教の説く「愛」であった。

It seems as if the history of humanity were divided into two epochs : the Epoch of the Law and the Epoch of Love. It seems as though humanity, during the time of its activity of earth, has made two great efforts : the effort to appreciate the Law and the effort to overcome the Law in Love. And in both efforts it has succeeded. It has reached and proved the Two Complementary Absolutes, the Absolute of the Father, of the Law, of Nature, and the Absolute of the Son, of Love, of Knowledge. What remains is to reconcile the two.[3]

「法」は古代から中世，そして近代に到るまで由々しく論じられてきた。その最高の表現は，「愛」との関係において語られるヨブ記，アイスキュロス，ダンテ，ボッティチェリであったとロレンスは言う。プラトンとラファエルは，その関係性をおさえつけ，「法」の絶対性を抽象のレベルにまで押し上げたのである。一方，「愛」の至高の表現は，「法」との関係のもとに呈示された。レンブラント，シェイクスピア，シェリー，ワーズワース，ゲーテ，トルストイ，そして，ターナーといった人々を彼はあげる。そして「愛」を「法」との闘いで描いたのが，ドストエフスキー，ハーディ，フローベールという人々であったとロレンスは言う。しかし，ロレンスは，これらの巨匠たちが，彼らの描く「愛」と「法」の闘いの真実性，完全性の故に，「愛」を，「法」を，あるがままに活動せしめ，逆に，人の魂に十分な満足を与えないままにしていると言う。

つまり，ロレンスは，「法」と「愛」の調和を作り出すことが，人に残されていると言うのである。それらは，別々のものでも偶然あるものでもなく，互いに補足的なものである。ある意味では，決して相入れないもの，絶対的なものである。それらは共に不動の純粋性を持ち，同時に，自由自

在に諸事に対応する可動性を保つ。二つのものが調和し，均衡して存在する状態が，本物の人間の存在の条件であり，人間の英知の条件である。それが人間の精神であり，感性であり，肉体である。つまり，二つにして一つの存在のしかたである。

The two great conceptions, of Law and of Knowledge or Love, are not diverse and accidental, but complementary. They are, in a way, contradictions each of the other. But they are complementary. They are the Fixed Absolute, the Geometric Absolute, and they are the radiant Absolute, the Unthinkable Absolute of pure, free motion. (*sic*) They are the perfect Stability, and they are the perfect Mobility. They are the fixed condition of our being, and they are the transcendent condition of knowledge in us. They are our Soul, and our Spirit. They are our Feelings, and our Mind. They are our Body and our Brain. They are Two-in-One.

And everything that has ever been produced, has been produced by the combined activity of the two, in humanity, by the combined activity of soul and spirit. When the two are acting together, then Life is produced, then Life, or Utterance, Something, is *created*. And nothing is or can be created save by combined effort of the two principles, Law and Love.[4]

そして，その調和を作り出すことが課題として残される。ロレンスは，男と女の完全な結びつき，補充しあう女性と男性の調和のある至高の結合にその答えを見つけようとした。なぜなら，法の原理は女性の中に，愛の原理は男性の中に，最も強く見られると考えたからである。「愛」を支える可動性，可変性は男性の中に多く見られる法則である。「法」を支える固定

性，保守性は女性の中に多く見られる。女性は，根のように，下降し，中心に向かい，始原的なものを求める。男性は，茎のように，上昇し，発見を求め，発言しようとする。ロレンスの語るこの男と女の補完的根本原理は，程度の差こそあれ，また，まさに20世紀末の現在のように，時代によって，或いば地域によって，逆転現象が起こったりするにしろ，人間の営みを根底で支えてきた。そして，これからも支えて行く最も重要な行動原理と言えるだろう。

Now the principle of the Law is found strongest in Women, and the principle of Love in Man. In every creature, the mobility, the law of change, is found exemplified in the male, the stability, the conservatism is found in the female. (. . .) The woman grows downwards, like a root, towards the centre and the darkness and the origin. The man grows upwards, like the stalk, towards discovery and light and utterance. (. . .)

We start from one side or the other, from the female side or the male, but what we want is always the perfect union of the two. That is the Law of the Holy Spirit, the law of Consummate Marriage.[5]

4. 二者の合一

再度評論「王冠」に目を転ずるとき，かくして，我々はライオンとユニコーンの対峙が，つまりは，力志向と愛志向の闘いが，「ハーディ」で披瀝された「法」と「愛」の二元論と軌を一にするものであることを知る。

両者の対立は，闇と光，肉体と精神，始原と終焉，女と男，の二項の対立に重なり，畢竟，その二者の直接的な衝突の中からのみ両者の極致的な状態が引き出されるのであり，その両者の究極の限界を越えたところでの合一が成就されるのだ，とロレンスは言う。その衝突，合一の際に生じる，

ぶつかりあった波の泡立ちの如きものが王冠である。だから，二者は，王冠を求めて闘うのであってはならない。王冠は結果として闘いの頭上に輝くのである。

There are the two eternities fighting the fight of Creation, the light projecting itself into the darkness, the darkness enveloping herself within the embrace of light. And then there is the consummation of each in the other, the consummation of light in darkness and darkness in light, which is absolute : our bodies cast up like foam of two meeting waves, but foam which is absolute, complete, beyond the limitation of either infinity, consummate over both eternities. The direct opposites of the Beginning and the End, by their very directness, imply their own supreme relation. And this supreme relation is made absolute in the clash and the foam of the meeting waves. And the clash and the foam are the Crown, the Absolute. (259)[6]

人は生きることの過程で，自分が，かくの如き相関的な存在であることを知っている。そして人は，最終的に，あらゆる対立から免れ，絶対的な存在となる合一の道のあることを知っている。

ところが，人は，目前の時間の中で一瞬吹き飛ばされ，足をすくわれる。光が闇の中を伝わらず，実を結ばせることのない不毛な光のままであることがある。或いは，自分の中の不均等性が，その人を殆ど闇の方向にのみ引き寄せることがある。

その時，その偏った，成就されていない，満足していない精神は，全世界を自分の秩序のもとに引き込むことで，全的な存在になろうとする。相対するものをむさぼり，食い尽くして絶対のもの，永遠のものになろうとする。一極に固執し，もう一方の極を吸収し尽くそうとする。つまり，相

対立するものの一方への偏向は，相対するもののもう片方をつぶすことによってのみ，全的になろうとする。ロレンスはそれを，言わば自分の尻尾をくわえた蛇の如き不毛の絶対性に喩えている。

Then the unconsummated soul, unsatisfied, uncreated in part, will seek to make itself whole by bringing the whole world under its one order, will seek to make itself absolute and timeless by devouring its opposite. Adhering to the one eternity of darkness, it will seek to devour the eternity of light. Realising the one infinite of the Source, it will evdeavour to absorb into its oneness the opposite infinite of the Goal. This is the infinite with its tail in its mouth. (267)

唯一絶対のものの主張がある。唯一の神，唯一の創始者，唯一の始原，唯一の道，唯一の法，唯一の目的，唯一の我，等等。これは英雄的な絶対君主，シーザーやサウルの如き戦王たちのそれである。そして彼らは，必然的に滅亡する。

しかしながら，さらにまた，この戦王たちにとって，ユダのような存在たるブルータスやダビデの如き人物たちがいる。二つの極の炎の存在に気付いているが，そのいずれにも身を投じない知恵者たちである。二つの炎の中間に身を置き，自分のエゴを前面に押し出し，「我が意の正しさ」を勝ち誇って見せる者たちである。だが，勝ち誇る（“triumphant”）者は必ず皆滅びるのである。

勝つ者は滅びる。シーザーしかり。ナポレオンしかり。同じく，愛をもって勝ったイエスしかり。シェリーしかり。

ローマでは，勝利がローマの衰亡の根元にあった。そして今，世界中に自由を施そうとするイギリスの驕慢の中にイギリスの衰亡が潜んでいる。

He who triumphs, perishes. (. . .) Triumph is a false absolution, (. . .) (269)

In the Roman "Triumph" itself lay the source of Rome's downfall. And in the arrogance of England's dispensation of Liberty in the world lies the downfall of England. (269)

第一次大戦のさなかにある祖国イギリスに対して，いかにも大胆で率直な批判であった。読者の困惑を含めて，雑誌 *The Signature* が早々に打ち切られたのは，ロレンスが大胆すぎたのか，それとも，主幹マリが臆病すぎたのか，いずれにせよ，ロレンスの数年来自己のうちに暖められていた宇宙二元論が，時代に問いかけたことのインパクトは，由々しきものであったと言わざるをえない。

5．崩壊の流れ

ロレンスの二元論は，相対立するものの究極の合一，極致への到達という積極的，肯定的な行動論を伴うものであった。合一の時，対峙しあったものは各々その独自の特質を一層増幅させることになる，という"新しい生"の呼びかけであった。しかしながら，注意すべき点は，この彼の理論は，些かも場当たり的，やればどうにかなるといった楽天的な思考ではないということでる。

二つの炎が，混じり合わず，調和しないで，別々のままに燃え進んでいく場合，いつしかその炎は燃え尽き，闇は闇に，光は光に，熱いものは熱いものに，冷たいものは冷たいものに帰還する。そこには，死，腐敗，崩壊が残される。ウジ虫が活動の担い手となって分離を促進し，ぶつかった大波が分かれて流れていった後もなお残ってくだける小さな泡のように留まっている。おぞましく，考えるに耐えがたいものがある。一時の崩壊の流れとでも言うべきものである。丁度，二つの平行した流れが一時の創造

の流れであるのと同じである。逆に言えば，永遠にして完全となるのは，唯一，二つのものが出会い，互いに完璧に一つのものへと浸透しあった場合だけである。

The flame is gone, the flower has leapt away, the fruit ripens and falls. Then dark ebbs back to dark, and light to light, hot to hot, and cold to cold. This is death and decay and corruption. And the worm, the maggot, these are the ministers of separation, these are the tiny clashing ripples that still ebb together, when the chief tide has set back, to flow utterly apart.

This is the terror and wonder of dark returning to dark, and of light returning to light, the two departing back to their Sources. This we cannot bear to think of. It is the temporal flux of corruption, as the flux together was the temporal flux of creation. The flux is temporal. It is only the perfect meeting, the perfect utter interpenetration into oneness, the kiss, the blow, the two-in-one, that is timeless and absolute. (271-272)

問題は，この崩壊の流れが，実際，広い範囲に及び，蔓延しており，従って，死そのものが言わば極致の状況と捉えられ，生そのものがある種の否定，無，を表すようになってしまっていることである。現代人の生は専らそれ自体，合一の成就の否定，防害，拒否であり，それは人間の無価値化，非在といった現象を生み出している，とロレンスは述べる。

It may be that our state of life is itself a denial of the consummation, a prevention, a negation ; that this life is our nullification, our not-being. (272)

十分な自己燃焼と相対立するものとの極致的な合一を経ないままの存在の蔓延。崩壊，堕落の奔流へとつながるこのような蔓延状態は，実際，表面の外皮の下で進んでいる。その外皮は，内実の崩壊の作業が終わるまでは，当面まだ完全であるように見え，偽りの絶対性を維持している。しかし，その後，外皮も，つまり，公的な形式をもつもの，文明，人類の意識そのものも，分離，崩壊の流れを辿りはじめる。文明が，人類の意識が，存在をやめ，崩壊の流れにはまったままの単に一時的で擬似的な結合のみがくり返されるようになる。ロレンスは，同時代の人間と社会の状況をこのように見ていた。或いは，イギリスという国の危機的状況をそのように捉えていた。従って，二つのものの極致的合一に託されたロレンスの生の呼びかけは，既に戦争という崩壊の流れに飲み込まれつつある同時代への火急の訴えであると同時に，前世紀から続けて蔓延しつつある終末的死生観，世界観に抗う，決して楽天主義ではない，死の淵，崩壊の流れを見定めながらの，存在論的呼びかけであったのである。

6．“脱”国家論

雑誌 *The Signature* 発行の計画が 1915 年 9 月初頭にうち出され，同月 20 日にロレンスは「王冠」第一章を同誌に寄稿した。以後，10 月 2 日までに六章まで執筆完了。但し，先述の如く，同誌は「王冠」第一，二，三章を掲載しただけで廃刊となった。その間，ロレンスの小説活動に致命的な事件がもちあがっていた。前年「ハーディ」執筆終了後，ロレンスは，二年越しでとりくんでいた小説『虹』の最終稿（第四稿）にかかりきり，1915 年 3 月に完成に到った。最初は「姉妹」と題され，途中「結婚指輪」と改題されたこの小説は，二稿，三稿と進むうちに，構想が一層大きくなり，ロレンスはそれを『虹』と，その後書かれる『恋する女たち』に分けることにしたのであったが，この二つの小説は，ともに，まさに彼の二者合一の理論を根底に据えた入魂の力作であった。『虹』は，ロレンスが「王冠」

にとりくんでいた9月30日に出版されたが，二カ月とたたない11月13日，突然，警察の命令で出版禁止となった。警察裁判所判事がこの本を猥褻であると宣言し，出版社（Methuen）に罰金を科し，発行部数を全て廃棄処分にするよう命じたのである。警察からロレンスには何の連絡もなかった。出版社メシュインは，自社への様々な波及を恐れ，命令に応じた。ロレンスには出版社からも何の連絡もなかった。成り行きを知ったロレンスは驚いてメシュイン社にかけあったが，埒はあかず，『虹』は作家の存在を無視して，闇に葬られる恰好となった。以後，ロレンスの作品は常に猥褻の汚名を着せられることになった。しかしながら，『虹』の出版（9月30日）――「王冠」一，二，三章出版（10月4日，18日，11月1日）――『虹』発禁（11月13日）――*The Signature* 廃刊，のプロセスは，どのように考えても，二つの作品の出版にまつわる因果関係を認めないわけにはいかないだろう。つまり，第一次大戦開始後数カ月の時点で，当局が恐れ，或いは，極力排除しようとしているのは，文学の猥褻性という表面の現象よりも，イギリスという国家の，そしてイギリス人という国民の意識の高揚が，内側から切り崩されることでなかったのか。

『虹』は，ロレンスのドイツ人の妻フリーダの姉エルザ（Else）に捧げられている。[7] そして主人公アーシュラ（Ursula）の恋人スクレベンスキー（Skrebensky）は，イギリス軍の工兵で，その仕事に誇りを持っているが，最終的に，アーシュラは彼を拒否する。キンキードウィークス（Mark Kinkead-Weekes）は，『虹』のこのような要素が当局を刺激し，危険とまでは言わなくても，厄介な存在であるロレンスを葬る良い機会として出版禁止の処置がなされた可能性はあると指摘している。[8]

確かに，キンキードウィークスの言うような直接目に見える形でのドイツ人への献辞やストーリーの中の英国軍人の批判的扱いが当局への挑発と映りかねなかったのは事実であろう。しかしながら，そのような表面の事実よりも，その裏にある根本的なところでのロレンスの国家に対する考え

方は，当局にとって，非常に気になる，ある意味では“危険”窮まりない思想であったろうと筆者は推測する。つまり，ロレンスの“脱”国家観とも言うべき考えが，そこに潜むと筆者は考えるからである。例えば，アーシュラが，工兵として戦場での橋の建設や鉄道敷設といった仕事に誇りを持っているスクレベンスキーと戦争について話し合う場面がある。議論は必然的に国家についてのそれとなり，スクレベンスキーが国というもの無しに自分というものはありえないと言うのに対し，アーシュラは，国とは無関係の自分というものがあると主張する。

“Well, if everybody said it, there wouldn't be nation. But I should still be myself,” she asserted, brilliantly.

“You wouldn't be yourself, if there were no nation.”

“Why not ?”

“Because you'd just be a prey to everybody or anybody.”

“How a prey ?”

“They'd come and take everything you've got.”

“Well, they couldn't take much even then. I don't care what they take. (. . .)”

“That's because you are a romanticist.”

“Yes I am. I want to be romantic. (. . .) I hate soldiers, they are stiff and wooden. What do you fight for, really ?”

“I would fight for the nation.”

“For all that, you aren't the nation. What would you do for yourself ?”

“I belong to the nation and must do my duty by the nation.” (. . .)

“It seems to me,” she answered, “as if you weren't anybody — as if there weren't anybody there, where you are. Are you anybody,

really ? You seem like nothing to me."[9]

このときアーシュラは，国を越えた存在を人間の生き方として語っている。国家によって自分の持てるものを守られなくとも，裸のままの自分がいると言うのである。

基本的に，このような独立した個の思想に支えられて，アーシュラはこの後，スクレベンスキーと別れ，一人，未知のものの探索の旅に出かける決心をする。家族から，故郷の町から，イギリスから，自分を取り囲んでいた全てから，一旦脱却して，新しい生を，未知の世界を探ってみようとする主人公の決意は，旧来の国家の意味に囚われない“脱”国家的思考と言ってよいだろう。人物の描写の猥褻性の如何よりも，当局が当面，何としても崩し，排除すべきであると考えた対象は，この“脱”国家意識とでもいうものだったのではなかったか。現に，警察裁判所は具体的に『虹』のどの部分がどのように猥褻であるか指摘しているわけではなかった。

翻って，再度「王冠」に立ち戻ると，そこには光と闇の相拮抗する状態の中から生ずる絶対的なもの，或いは，力と愛の対立と調和から生じる新たな世界，といった二元的宇宙の把握とその弁証法的未来観が述べられているのを改めて確認できる。それは正に，既存の地域社会や国家の成り立ちとは異なった軌道の上にある理想社会と言えるかもしれない。「勝ち誇るものは必ず滅びる」としたロレンスの帝国滅亡論は“脱”国家の，国と無関係にこの地球上のどこかに建設されねばならないユートピアを彼が想起していたことを裏付けるものであった。

「王冠」から遡ること七カ月，1915年2月の時点で，ロレンスは既にこのユートピア（ラナーニム“Rananim”と名付けられた）建設の夢について語っている。[10] この時彼が抱いたユートピアの姿は，後に「王冠」で語られる理想社会と完全に一致してはいない。しかし，ラナーニムが，『虹』のアーシュラの最終的判断と決意に何らかの繋がりを有することは十分考え

られるし，また重大化する戦争の局面にとり囲まれて，それに対する直接的な示威行動としてとりくまれた点を無視できない「王冠」執筆に当たっては，このラナーニムがその論述の基盤のオアシスとしての役割を果たしていたことは，想像に難くない。

ラナーニムは，ロレンスがそれを語った当時の状況からすれば，いかにも唐突で，夢物語であると周りの人々には映ったのであった。しかしながら，個々の人の人間性が解放され，発揮される場所として，集まった人々が地球上の何処かに建設する生活共同体というラナーニムのイメージの発想は，むしろ20世紀末の現代に住む我々には，全くの夢物語として簡単にかたづけたり，無視したりするのは許されないものと理解されるのではないだろうか。それが実現するためのプロセスや諸問題が容易になったわけでは決してない。ロレンス自身，ようやく大戦が終わった後の世界の収拾の仕方を見て，インターナショナリズムに対して殆ど絶望しかかったこともあったのである。しかし，超国家的意識に立って，地球の上の生活を真剣に考えなければならない時に人類が立ち到っていることに20世紀末の我々が気づき，痛感しているのは事実である。ロレンスの考えていたことは，この辺りで意外と深い現代との接点を結ぶと考えられる。

以上，評論「王冠」をめぐり，その意味と役割について考察し，ロレンスの“脱”国家的観点を眺めてきた。この思想がさらにロレンスのその後の創作活動にどのように関わっていくかは，また次の機会に考えていきたいと思っている。

注

1 D. H. Lawrence, "Note to The Crown," *Reflections on the Death of a Porcupine and Other Essays* (1925 ; rep. Cambridge ; Cambridge UP, 1988), p. 249.

2 「王冠」の思想と基本的に殆ど一致する "Study of Thomas Hardy" をロレンスは1914年10月に書き始め，12月に一応書き終えたが，再度書き直すつもりでいた。"Hardy" が出版されたのは1936年，*Phoenix*（遺稿集）においてである。

3 D. H. Lawrence, "Study of Thomas Hardy," *Study of Thomas Hardy and Other Essays,* ed. Bruce Steele (Cambridge ; Cambridge Up, 1985), p. 123.

4 ibid., p. 125.

5 ibid., p. 127.

6 D. H. Lawrence, "The Crown," *Reflections on the Death of a Porcupine and Other Essays,* ed. Michael Herbert (Cambridge ; Cambridge Up, 1988).
以下，「王冠」からの引用は全てこの版から。引用ページは本文中（　　）内の数字で示す。

7 D. H. Lawrence, *The Rainbow* (1915 ; rep. Cambridge ; Cambridge Up, 1989), p. 5.

8 ibid., "Introduction" by Mark Kinkead-Weekes, p. xlviii.

9 ibid., pp. 288–289.

10 E. M. Forster への手紙（1915. 1. 28）及び Lady Ottoline Morrell への手紙（1915. 2. 1）参照。*The Letters of D. H. Lawrence,* II, ed. George J. Zytaruk & James Boulton (Cambridge ; Cambridge Up, 1981), p. 266, p. 272.